いつか夢見たあの空へ

わとすこ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

懲罰部隊の待遇と自身の言動が問題視され、前線に左遷された元オーシア国防空軍第４４４航空基地司令官マッキンゼイ大佐。

彼の左遷先はオーシア空軍第６１１臨時航空基地。

オーシア側、エルジア側共に欲するタイラー島への攻撃を行うための最前線基地であった。

その基地に所属する精鋭部隊であるストレンジ隊のストレンジ４としてファイターパイロットとなったマッキンゼイはクセの強いメンバー達とともにかつての己と向き合っていく。

目次

mission0 とある空軍大佐の独白 ―― 1
mission1 補給艦隊襲撃作戦 ―― 5
mission2 サイレントとノイズ ―― 14
mission3 スクランブル ―― 18

ｍｉｓｓｉｏｎ０　とある空軍大佐の独白

軍本部から連絡があった。
優秀な厄介者集団と名高い我らがストレンジ隊に新入りが入るそうだ。
なんでもその新入りの階級は大佐らしい。
一体何をやらかせばこんな辺境まで飛ばされる羽目になるのやら。
大佐殿の考えることはわからねえな。
まあ、なんだっていいさ。
重要なのはその新入りことマッキンゼイ大佐が我らがストレンジ隊所属、ストレンジ４のナイーブとして仲間に加わるってことだ。
基地司令からは好きに使えと言われている以上こちらも遠慮する必要はないだろう。
あまり期待していないが、少しは使える奴だと良いんだがね。

ｍｉｓｓｉｏｎ０　とある空軍大佐の独白

＊＊＊
最近、夢を見る。
はるか昔、私がまだあの蒼穹の大空に思いを馳せていた時代の夢だ。かつての私は戦闘機のパイロットを目指していた。
動機は単純。
あの大空を思うままに飛びたい。
それだけだった。まだ若かった私は戦闘機のパイロットになるのだ、と鼻息荒く軍の士官学校の門を叩いた。
しかし、私はパイロットになることができなかった。空戦演習の結果が振るわず、適性なしと判断されたためにパイロット育成プログラムから外されてしまったのだ。
私は荒れたよ。
空を飛ぶために軍人を志したと言うのに私はその準備すらできなかったのだ。

それからの私は何かに取り憑かれた様に出世を目指した。
まるで破れた夢の残骸を押し流すように。
詰め込めるだけの知識を頭に入れ、上官に忠実な兵士を演じ、出世を続け、とうとう大佐にまで上り詰めた。
しかし、これもまた上手くは行かなかった。
失態を犯し、私は辺境の地へと左遷されたのだ。左遷先はオーシア国防空軍第４４４航空基地。
人生とはままならぬものだ。
自嘲しながらもなお、私は諦めてはいなかった。
ここで功績をあげ、本部に返り咲く。
大空に見た夢に破れた私に残されたものはもはやそれしかないのだから。
第４４４航空基地での生活は酷いものだった。
ハリボテの設備、野蛮な囚人達、耳障りな警報音。
この基地の役割は敵軍の注意を引く為だけの囮基地だった。
基地としてのコンディションもまた最悪だ。
スクラップを繋ぎ合わせた急ごしらえの機体、ふざけた態度をとる懲罰部隊の囚人兵。
囮基地故に燃料も弾薬も常に余裕がない。
本部から運ばれる物資もまた基地の維持に必要な最低限の量、そして良く出来たハリボテだけだ。
しかし、何よりも最悪なのは奴らが空を飛んでいる、と言うことだ。
あの青い大空を。
私がとうとう上がることのできなかったあの大空をあの罪人達は悠々と飛び回る。
それが何より私の心をざわつかせた。
その鬱憤を晴らすように私は空から降りてきた彼らを理由をつけては独房に入れる。
空を飛ぶための翼を持つ彼ら。
翼を持つ資格すら与えられなかった私。
鎖にでも繋いで置かなくては嫉妬で狂ってしまいそうだった。

そんな日々を過ごしていた時、この掃き溜めに新たな罪人が現れた。
ハーリング殺し。
三本線の罪を背負った引き金がこの基地に配属されたのだ。
合わせて送られてきた資料には不自然な点がいくつも見つかったが、私には関係のない話だ。
懲罰部隊のコマが増えた。
それだけのことだ。

トリガーはよく働いた。
初出撃では管制塔に攻撃する敵機をことごとく撃墜してみせた。
一度の出撃で落ちた者がいないのは初めてのことだ。
２度目の出撃でもトリガーは活躍した。
敵対空兵器を単騎で壊滅してみせたのだ。
３度目の出撃ではかのミスターXと交戦し、生還してみせた。信じられん。ミスターXと言えばかつての戦争でエルジア軍のトップエースを務めた生きる伝説だ。ストライダー隊を守りながら自身も生還するなど並みの腕ではない。
４度目の出撃では逃げ出すトレーラーのことごとくを破壊し、エルジアの無人機部隊まで壊滅させた。
５度目の出撃でもトリガーは戦果を挙げた。
山脈に散在するレーダー施設を全て破壊したのはトリガーだ。
良い腕を持つパイロットであることは間違いない。
私とは違う。
そして６度目の出撃。
トリガーが懲罰部隊として参加した最後のミッションであり、私が今の立場で参加した最後の作戦でもある。
ＳＡＭをまるで居場所が分かっているかのように破壊し、敵増援すらことごとく撃破。
さらには最新鋭の無人機まで撃墜してしまった。
エース、と言うのはまさしくトリガーの様な奴のことを言うのだろ

う。
もはや会うこともないだろうが、奴を見ていると拭い去ったはずの空への未練が蘇る。
私はあいつが嫌いだ。
＊＊＊
『ストレンジ４、おいストレンジ４！応答しろストレンジ４！』
「何度も呼ばなくても聞こえている！」
私は今、何の因果かあの罪人達と同じ様に空を飛んでいる。
司令官の地位を失い、最前線の小さな基地に左遷された。同じストレンジ隊のメンバーも懲罰部隊に劣らぬ曲者ばかり。
「しかし、悪くない」
不思議と笑みがこぼれた。
かつて翼を持つことすら許されなかった愚かな男は今、翼を得てこの蒼穹の大空を飛んでいる。
この澄み渡る青にいつまでも浸っていたい。
私は、心からそう思うのだ。

ｍｉｓｓｉｏｎ１　補給艦隊襲撃作戦

大佐殿…おっと、今はストレンジ４のナイーブだったな。
わかった、わかったからそんな目で見るな。
もう間違えたりしねえよ。
まぁ、それはさておきナイーブの話だ。
奴を最初に見た時の印象は…そうだな…チグハグ、だな。
この基地に送られてきた連中の眼は一部の例外を除いて必ず何かしらの負の感情を帯びている。怒り、不満、絶望、不安…そんな所だ。
無論それは俺も例外じゃなかった。
まぁ、サイレントとノイズはその例外に当たるわけだが…奴らは特殊すぎるからな。
少し話がズレたか。
話を戻そう。
件のナイーブだが、奴は普通とは少し違った。奴の眼には確かに負の感情が浮かんでいた。そこは普通の奴らと変わらない。だが、同時に奴の眼にはほんの少しの期待と希望があったんだ。
おかしな話だろう？
ここは最前線の、しかも”あの”６１１臨時航空基地だ。さらに奴は支援部隊ではなくストレンジ隊のファイターパイロットとして配属されてる。
ストレンジ隊の異名は有名だろう。
死の部隊。
正規部隊に属する部隊の中で最も殉職率の高い職場。
それがストレンジ隊だ。
さらに奴のコールサインはストレンジ４。
最も入れ替わりが激しいポジションだ。
一ヶ月以上ストレンジ４が入れ替わらなかったという話を俺は聞いたことがない。
だがしかし、願わくばナイーブには少しでも長生きしてほしいもの

だ。

俺は、奴が空を見る時の少年のような眼が結構好きなんだ。

missionl　補給艦隊襲撃作戦

＊＊＊

全員集まったな？それではブリーフィングを始める。

知っての通り、先の侵攻作戦の成功により、我が軍はタイラー島南部飛行場の奪還に成功した。

ストレンジ隊にも相応の被害が出た。しかし、彼の犠牲を無駄にしないためにも我々はこれからの作戦を成功に導き、このタイラー島を奪還せねばならない。各自、肝に命じておいて欲しい。

このタイラー島を手にいれた者がこの戦争を制するのだ。

それでは、今回の作戦を説明する。

我が軍の偵察部隊がタイラー島北東部より接近する艦隊を発見した。報告から判断するにエルジア本国より秘密裏に送られた補給艦隊と見て間違いないだろう。

タイラー島にはアーセナルバードへの補給を行うサプライシップの発着場がある。恐らく基地とアーセナルバードへの補給物資を積んでいるはずだ。

南部飛行場を奪還したとはいえ依然として戦況は厳しい。奴らを見逃してやる道理もないだろう。

諸君らの任務はこの艦隊を壊滅させ、敵拠点への補給を阻止することだ。

敵艦隊に空母を確認したという情報は無いが、敵も当然我々の襲撃を予測しているだろう。

まず間違いなく無人機による迎撃が行われる。それを考慮した兵装で出撃しろ。

それからナイーブ、今回の作戦は君の試金石でもある。戦果をあげられない場合は相応の処罰を受けてもらうことになるからそのつもりでいるように。

以上でブリーフィングを終了する。

＊＊＊

私がこの６１１臨時航空基地に配属されてからおよそ二週間の時が過ぎた。配属当初は荒れたよ。

極東の基地に異動になったはずが最前線に変更になったのだから。

最前線では数多くのパイロットが戦闘機に乗り、空を舞う。

翼のない私はそれを見る事しかできない。

それが私にとっては何よりも辛かった。

しかし、配属後の私に甘えられた役割はファイターパイロットだった。

タイラー島南部飛行場奪還作戦にて撃墜されたストレンジ４の代わりとして用意された補充要員。

それが、私がこの基地で与えられた役割だった。

補充要員でも構わない。

殉職率の高い死の部隊であろうと知った事ではない。

空に上がる事ができる。

かつての私が求めて止まなかったあの大空を自らの翼で自由に飛ぶ事ができる。

それが私にはたまらなく嬉しかった。

配属後、直ぐに訓練が始まった。

私に課せられた訓練メニューは全て体作りだった。

元より空戦に関する知識は常に最新のものを頭に入れていた。破れた夢に縋り付く様に惰性で続けていた事だが、そのおかげで私は今、空に上がるための最短ルートを突き進んでいる。

それだけはかつての己を褒めてやりたいと思った。

訓練は苛烈を極めた。

軍人としての体を維持するための最低限のトレーニングは日常的

に行なっていたが、ファイターパイロットには持久力が必要だ。
故に訓練は必然的に走り込みが多くなる。
毎日２０キロの走り込み。
この二週間ひたすらそれを繰り返し持久力の強化に努めた。
その結果、私は今日空に上がる。
『ナイーブ、君のコールサインはストレンジ４だ。確認し、復唱せよ』
「ストレンジ４、コピー」
『ストレンジ４、離陸を許可する』
「ストレンジ４、クリアードフォーテイクオフ」
スロットルを押し込み、加速する。
機体の加速と共に体が後ろに引かれる感覚。
離陸した瞬間の浮遊感。
エンジンの放つ力強い振動。
全てが心地良い。
目の前に広がる広大な空に、私は実感した。
とうとう、この空に上がってきたのだと。
『他のストレンジ隊メンバーが先行して空に上がっている。指定のポイントで僚機であるストレンジ３と合流せよ』
管制塔からの指示に従い、レーダーを確認する。他のメンバーは既に離陸し、現在南西を編隊を組んで飛行中の様だ。
『ストレンジ４、高度制限を解除。グッドラック』
同時にスロットルを押し込み加速。
この大空を自由に飛べる快感に浸りながら部隊への合流を行なった。
少し飛ぶと綺麗な編隊を組んだストレンジ隊を発見した。先頭を飛ぶのは大鎌のエンブレムをつけたＦ―１６Ｃだ。
こいつがストレンジ１…
噂に名高い【死神】か。
『こちらＡＷＡＣＳ、コンダクター。敵艦隊とはおおよそ７０秒後にエンゲージ。全て撃破せよ。一隻たりとも逃すな』
「ストレンジ４、ウィルコ」

『ナイーブ、俺がお前の僚機だ。せいぜい落ちない様に気張れよ』
低い男の声。
僚機という事はこいつがストレンジ３なのだろう。ＴＡＣネームは確かチューナー。
チューナーがそう言うと同時に、敵艦隊が姿を現した。物資を乗せた補給艦と思わしき艦船が４隻とそれを覆う様に護衛艦が７隻周囲を守っていた。
随分と大層な守りだ。よほど大切なものを積んでいるらしい。
「ストレンジ４、敵艦隊をーー」
発見、と続けようとした瞬間、私の通信に被せる様に通信が入った
『ストレンジ隊、全機に通達』
静かな女の声だ。
発信者はストレンジ１、サイレント。
一体何を言うつもりだ…
『早い者勝ち』

同時に編隊から二つの機影が凄まじいスピードで飛び出した。
一機は大鎌のエンブレムが刻まれたストレンジ１のＦ―１６Ｃ、そしてもう一機は巨大なスピーカーのエンブレムが刻まれたＦ―１６Ｃだった。
恐らくストレンジ２、ノイズだろう。
サイレントとノイズはその場で急降下。重力を利用し機体を加速させるとものの数秒で敵艦隊の頭上に到達し、爆弾を投下した。
『ストレンジ１、爆弾投下』
『ストレンジ２、爆弾投下！』
二機が投下した爆弾は同時に起爆し、即座に二隻の護衛艦を海の底に沈めた。
それが開戦の合図だった。
レーダーに複数の反応が出現し、同時にコンダクターからの通信が入った。
『敵艦隊より複数の反応を確認。喜べ狂犬ども、追加メニューだ。食

い荒らして来い』
『ウィルコ。ナイーブは俺について来い！』
　同時にチューナーがアフターバーナーを点火し、敵ＵＡＶの群れに飛び込んだ。遅れぬ様に私もアフターバーナーを点火。チューナーを追って敵機の中に飛び込む。
『ストレンジ3、フォックス2』
　チューナーがミサイルを撃つ。同時に編隊を組んでいた無人機は散開し、迎撃行動に入った。
　いよいよ空戦が始まる。
　同時にコックピット内に耳障りな警告音が響いた。ロックオンアラートだ。レーダーを確認すれば私の背後には無人機が一機張り付いていた。
　即座に回避行動を取るためスロットルを押し込み、急上昇する。間髪入れずに右に旋回し、敵無人機の背後を逆に取り返した。
　今なら当たる。
「ストレンジ4、フォックス…」
　ミサイルを発射しようとした瞬間、コックピットに先ほどとは別の警告音が鳴り響いた。これはミサイルアラートだ。
　全身から嫌な汗が噴き出す。震え出しそうな腕を必死に抑え、フレアを発射しミサイルををやり過ごした。
　しかし、ミサイルへの対処に意識を割きすぎてしまったためか、すぐにロックオンアラートがコックピット内に響く。
　どうにかして振り切らねば。
　スロットルを押し込み、さらに上昇する事で雲の中に入り、敵無人機をやり過ごす。
　レーダーを確認し、タイミングを見計らってさらに急降下。敵無人機の背後を取った。
　次こそ当てる。
「ストレンジ4、フォックス2！」
　私の放ったミサイルは敵無人機に向けて真っ直ぐ飛び、着弾。敵無人機は制御不能に陥り、黒煙を上げながら海の中に沈んで行った。

『いいぞナイーブ！今夜はパーティだな！』
からかうようなチューナーの声が聞こえる。
一機落とした。
達成感から口元に笑みが浮かぶ。
だが、その一瞬の油断がまずかった。
コックピット内にミサイルアラートが鳴り響く。慌ててレーダーを確認するとすぐ後方に敵のミサイルが迫っていた。
さらに私を確実に落とすためか張り付くように飛ぶ一機の敵対反応。
あまりに突然の出来事のためか、私の思考が一瞬白く染まった。
ここであの無人機のミサイルが当たったらどうなる？
死ぬ。
私はこんなところで死ぬのか？
否。否だ。私はまだ、まだまだこの大空を飛び回りたいのだから。
まだ死ぬわけにはいかない。
「クソッ！」
フレアを展開。間に合うかどうかは賭けだったが、なんとか賭けには勝ったようだ。ミサイルはギリギリのところでフレアに着弾し、爆発した。
『邪魔』
女の声。
レーダーを確認するとサイレントの反応があった。太陽の中に入りつつ私の頭上から真っ直ぐに急降下してくるのがわかった。
『ストレンジ1、フォックス2』
爆発音とともに背後の無人機の反応が消えた。サイレントはそのまま降下を続けると海面ギリギリを飛び、ミサイルを敵艦隊に向けて発射。護衛艦をさらに一隻沈めた。
『大丈夫か、ナイーブ。あとでお姫様に礼を言っとけよ』
からかうようなチューナーの通信を無視し、私は敵無人機を追うためにアフターバーナーを点火する。
また一機の無人機を捉えた。敵の背後に張り付き、サークルの中央

に敵機の尻を捉える。
「ストレンジ4、フォックス2」
私がミサイルを発射したと同時に巨大な爆発音が鳴り響き、青白い光が海上に四つ出現した。レーダーを確認すればターゲットである補給艦の反応が消えており、反応があった場所にはサイレントの反応があった。
どうやら4隻全てあの女が食い尽くしたらしい。
『敵補給艦隊の撃沈を確認。さすがだなストレンジ1。後は無人機だけだ。残さず平らげて来い』
コンダクターの通信と共にサイレントが空に上がる。
そこからはあっという間だった。
サイレントが編隊を組む二機の無人機と交差したと思えば二機が同時に黒煙を上げて海に沈む。ノイズはサイレントと張り合うように笑い声を上げながら敵無人機を追い、撃墜していく。
二機の動きを見ているとまるで移動する台風の様だった。彼女たちが通った後には撃墜された無人機の部品だけが残る。
『敵無人機の撃墜を確認。ミッション終了だ。全機、帰投せよ』
ＡＷＡＣＳの指示に従い、基地へ向かって真っ直ぐに飛ぶ。
帰り道ではノイズがサイレントに執拗に絡んでいた。撃墜数を競いたかったようだが、短く返されるのみで相手にされていない。
そんなやりとりを聞き流しながら私は自分が自由に空を飛ぶこの一瞬を噛みしめるように味わっていた。
私はこの空を自由に飛ぶ翼を本当の意味で手に入れたのだ。

＊＊＊

敵補給艦隊は壊滅。タイラー島拠点への補給を阻止することが出来た。戦況は依然厳しいままだが、これ以上悪化することは阻止できた。
諸君らの働きに感謝する。
これからも一層の尽力を期待する。
これでデブリーフィングは終了だ。各自次の任務に備えて体を休

めてくれ。
それとナイーブ。
ようこそ、６１１臨時航空基地へ。
我々は君を歓迎しよう。

ｍｉｓｓｉｏｎ２　サイレントとノイズ

初めて戦場の空に上がったあの日、私は空の恐ろしさを身をもって体験した。
鳴り止まぬロックオンアラートに接近するミサイルの存在を伝えるミサイルアラート。
撃墜された機体がもうもうとあげる黒い煙。
私が今までの人生において感じたことのないほどの濃密な死の匂いがあの空には満ちていた。
恐ろしいところだ、と思った。
死の匂いに満ちた恐ろしい場所。
きっと何人もの人間の命をこの残酷な蒼は飲み込んできたのだろう。
私は心底この空に恐怖していた。
だが、しかし。
私は耐えがたい恐怖を感じると同時にこの空はこの世界で最も澄んだ場所である、とも思った。
この残酷な蒼の前には全てが平等なのだ。
地位も人種も国籍も性別も全てが関係ない。
この空はそのようなしがらみを全て等しく無慈悲に飲み込んでいく。
『自由とはこの世界で最も残酷なものの１つだ』
遠い昔に聞いた言葉をふと、思い出した。
当時の私には彼が何を言っているのか全くわからなかったが、今ならはっきりと理解できる。
彼の言った通りだ。
自由の象徴たるこの大空は世界で最も無慈悲な場所だった。

ｍｉｓｓｉｏｎ２　サイレントとノイズ

私が初めて空を飛んだあの日から数日の時が過ぎた。あれから新たな任務が言い渡されるというわけでもなく、ストレンジ隊の面々は思い思いの時を過ごしていた。
私は出撃前と変わらずトレーニングの日々に明け暮れている。
いや、変わったと言えば1つだけ出撃前とは違う点がある。
「おう、精が出るなナイーブ」
トレーニングルームの入り口から入ってきた中年の男。
先の任務で私の僚機を務めた男、ストレンジ3のチューナーだ。
パイロットとしては何年も先輩と言うことになるが、年も近く比較的話しやすい男だ。
階級は私の方が上のはずだが…まぁ、今の私にはどうでもいいことだ。
話を戻そう。
彼とは先の任務の後開かれた私の歓迎会で話して以来共にトレーニングをすることが多い。
特に時間を合わせているわけではないがここでは彼と会うことが多い。
ここ数日でわかったことだが、チューナーはよく喋る男だ。いつも彼の口からは様々な話題が洪水のように溢れ出してくる。
そこでふと、思った。
この男は何のために空を飛んでいるのだろうか。
あの恐ろしくも美しい空をどんな想いを抱いて飛んでいるのだろうか。
そう思った時、基地内に耳障りなサイレンが鳴り響いた。
「敵襲か!?」
チューナーはそう叫ぶと同時に走り出す。
突然の警報に一瞬思考が止まるが、すぐに私もチューナーを追いかけるように走り出した。
基地内は緊迫した空気が流れており、そこら中から慌ただしく走り回る音と状況確認の声や怒声が響き渡っていた。
これはかなりまずい事態だ。

この６１１航空基地はタイラー島にも近い最前線基地だ。敵の攻撃も相応に激しいだろう。一刻も早く空に上がり、防衛行動を取らなければならない。
配属から２回目の出撃でスクランブルとは。
全身から嫌な汗が滴るのを感じながらガレージにたどり着く。扉の前で一度呼吸を落ち着けた後、扉を開けて中に入った。

「スクランブルだ！さっさと行け！バカ共が！」
私がガレージ内に入ると同時にガレージ内に男の怒声が響き渡った。
この声はブリーフィングの時にも聞いた指揮官のものだ。
一体何事かと思い声の方を見ると、そこにはお互いに五枚ずつトランプを持ち睨み合っているサイレントとノイズがいた。
２人の間にはバラバラに積まれたカードの小さな山ができている。
ずいぶん長くやっているようだった。
「少し待って欲しい」
指揮官の方を向きもせず、そう答えるとサイレントはカードを持ちノイズを見ていた。
「今日こそは勝たせてもらう」
そう言いながらサイレントは手に持つ五枚のカードを開く。

心なしか、サイレントの目がキラリと光った気がした。
そこにはスペード、ダイヤ、ハートの６にクラブ、スペードの８が並んでいた。
「フルハウス」
どうやらポーカーをしているらしい。
フルハウスといえばポーカーの中でも上から４番目に強い役だ。
確かにこれなら勝ちを信じるに足るだろう。
サイレントのカードを見たノイズは目を見開き、まだ開いていない自分のカードと場に出たサイレントのカードをせわしなく見比べると顔を伏せ、小刻みに震え始めた。

その反応を確認し、勝利を確信したのかサイレントの顔にも小さな笑みが浮かぶ。
「ククク…悪いな！」
ノイズが顔を上げ、カードを場に開く。
開かれたカードはスペード、ダイヤ、ハート、クラブの４にスペードの２だった。
「フォーカード。今日も俺の勝ちだな」
悪いなサイレント！と高笑いするノイズ。
そんな彼の様子を見てサイレントは呆然とした表情を浮かべた後、自分の役とノイズの役を何度も見比べる。
しかし結果は変わらない。
何の疑いの余地もなくサイレントの敗北だった。
「……もう一回」
「スクランブルだと言ってるだろうが！さっさと行け！」
痺れを切らした指揮官が懲りずに再戦しようとするサイレントのジャケットを掴み、そのまま機体まで引きずっていく。
サイレントはノイズを睨みながら指揮官に引きずられて行った。
一方のノイズはと言えば子猫のように運ばれていくサイレントを見て大笑いしながら自らの機体に向かって歩いていく。
あまりの光景に何が起きているのか理解できず、一瞬思考が止まったがすぐにスクランブルであることを思い出し、私は慌てて自らの機体に走って行った。

ｍｉｓｓｉｏｎ３　スクランブル

『レーダーサイトが沈黙！』
『スクランブルだ！早く空に上がれ！』
２度目の空は随分と騒がしかった。
あの基地内での出来事を見ているからだろうか、それともスクランブルで出撃することが初めてだったために現実感がないからか、はたまたあの４４４基地での暮らしに慣れてしまったからか、あまり緊急事態であるという実感が湧かなかった。
『状況を報告しろ！』
『爆撃機が飛来！機数は不明！』
『ストレンジ隊、離陸を急げ！』
『ストレンジ４、聞こえるな？こちら管制塔。先に出撃したストレンジ３が現在時間を稼いでいる。今のうちに出撃してくれ』
ウィルコ、と返しながらエンジンを起こす。
私の乗るＦ１６―Ｃが熱を取り戻していくのを感じる。
また、空に上がれる。
そう思うと私の胸の中になんとも言えない高揚感が広がっていった。
『ストレンジ４、離陸を許可する』
スロットルを押し込む。
機体の心臓が大きく鼓動し、同時に私は空へと上がった。
『ストレンジ４、高度制限を解除。グッドラック』
高度を上げ、基地を見回すとそこにはひどい光景が広がっていた。
滑走路付近に残る爆発痕に破壊された港湾設備から朦々と上がる黒い煙。
空には複数の敵機が飛び回り、見覚えのあるエンブレムを刻んだ機体が敵を散らすように飛んでいた。
『遅いぞナイーブ！悪いが今回は俺も手一杯だ！自分の身は自分で守れよ！』
通信と同時に、機内にミサイルアラートが鳴り響いた。レーダーを

確認すると機影は友軍3機に対して敵が6機。
一度大きく深呼吸し、心を落ち着かせてから私は操縦桿を大きく傾けて旋回することでミサイルを回避した。そして即座にスロットルを押し込み、敵機から少し距離を取る。
『こちらＡＷＡＣＳ　コンダクター。侵入した所属不明の爆撃機を全機撃墜せよ。先の爆撃でレーダー施設を酷くやられた。各機の奮闘を期待する』
ウィルコ、と返答をして再度レーダーを確認する。
私から少し離れたところにチューナーの機体があり、その付近には1機、敵機の反応があった。
さらに離れたところにはサイレントとノイズがおり、彼女らはそれぞれ2機ずつを相手しているらしい。
さて、私はどう動くべきなのか。
そう考えていた時、ロックオンアラートが鳴り響いた。
背後を取られた。
続けてレーダーにミサイルの反応が表示されると同時に機内にミサイルアラートが鳴り響く。
この距離では回避は不可能だ。
操縦桿を傾けて急上昇し、同時にフレアを放出する。
ミサイルがフレアに着弾し、爆発音が鳴り響いた。
続けて再度操縦桿を傾け、機体を太陽の中に隠すように急降下し、敵の背後を取った。
「フォックス2！」
私の機体から放たれたミサイルが敵の機体を食い破らんと勢いよく飛ぶ。
しかし、敵もまたフレアを放出することで回避した。
一度仕切り直すようにお互い距離を取る。
その時、レーダーに新たな反応が表示された。
『敵爆撃機の反応を確認。ストレンジ隊各位は急行し、目標を撃墜せよ』

コンダクターからの指示が来る。
しかし、私も今目の前にいる敵の相手で手一杯だ。ここで爆撃機の迎撃に向かえば確実に落とされるだろう。
と、なれば答えは１つ。
「１秒でも早くこいつを落とすしかない」
一気にスロットを押し込み、機体を加速させる。敵も一瞬遅れて加速し、私の後に追い縋った。
高度計の数値が急激に上昇し、体にかかる重力が相応に増加する。
しかし、それに耐えながら私は加速を続ける。
高度計が２０００を超えたところで反転。
再度、太陽を背に敵に向けて飛び込む。
先ほどと違うのは今度は正面から敵機に向かっているということ。
正面から迫る敵のＦ３５―Ｃをサークルの中央に捉え、ミサイルを発射した。
「ストレンジ４、フォックス２！」
ミサイルを撃つと同時に操縦桿を傾け、急降下。
背後からは大きな爆発音が鳴り響く。
敵機は黒煙を上げながら急激に高度を落とし、やがて海の中へと消えていった。
やった。
高揚感に包まれるが、直ぐに目標の爆撃機が迫っていることを思い出し、私は目標の位置を探そうとレーダーを見る。
『フォックス２』
通信機からサイレントの静かな声が響く。
同時に、敵爆撃機の反応が消失した。
その後次々とチューナー、ノイズの通信報告が入る。
その度にレーダー状に表示される敵性反応は１つ、また１つと消失し、最後には全ての反応が消失した。
『全ての爆撃機の撃破を確認した。お前たち、よくやってくれた』
コンダクターから作戦終了の通信が入ったことで体から力が抜ける。

深い息を吐き、私は天を仰いだ。
今回も生き残った。
これで、また空へ上がることができる。
あとは帰るだけだ、とそう思っていた。
『まだ、終わってない』
サイレントから突然通信が入る。
いつもどおりの平坦な声だったが、しかしどこか緊張しているようにも感じられた。
『おいおい、どうしたんだサイレント。レーダーを見てみろ、もう敵は残っちゃいない』
ノイズが茶化すように話すが、サイレントはノイズを無視して続けた。
『何か、来る』
同時にコンダクターから通信が入った。
『いや待て、ストレンジ1の言う通りだ。レーダーにボギー1！凄い速さで近づいてくるぞ！総員警戒！』
『一体どこから出てきやがった!?レーダーに反応なんてなかったぞ！』
『総員回避行動！』
ノイズのぼやきをかき消すようにサイレントが突然叫ぶ。
何を、と思った瞬間、サイレントの圧に当てられたのかわたしは無意識のうちに操縦桿を大きく傾けていた。
直後、私の直ぐ隣を一発のミサイルが通り抜けていった。
「なんだ、今のは!?」
思わず叫ぶ。
ミサイルが隣を通り過ぎるまで一切気付くことができなかった。
『落ち着けナイーブ！なんだかわからんが敵がいるぞ！』
チューナーからの激が飛ぶ。
慌ててレーダーを確認する。
しかし、私のレーダーには何の反応も示されていなかった。
しかし、ミサイルの放つ雲の軌道の先。

そこにはナニカがいた。
「何だ、アレは…」
思わず口から漏れたのはそんな言葉だった。
現れた機体は全てが異様だった。
全体的に細長いフォルムを持つその機体は全身を真紅に染めており、主翼の付け根には大きなカナードがついている。
加えて異様な翼を持っていた。
Ｖ字に折れ曲がった特徴的な２対の翼はＳｕ―４７のような前進翼にも見えるが、常に変動し続け小さな調整を続けている。どうやら可変翼の機能も有しているようだ。
本来はガラス張りとなっており、パイロットが乗っているはずのコックピットは真紅の装甲に覆われており、とても人が乗っているようには見えない。
加えてコックピットを覆うその装甲にはダイヤ型の穴のようなものが空いており、そこからはカメラのレンズらしきものが見えていた。
本来なら所属やパイロットの誇りを示すエンブレムはその機体のどこを探しても見当たらず、その様がこの機体の異様さを際立たせている。
今までに見たことがないほどに不気味な機体がそこにはいた。

これは人を乗せて空を舞う戦闘機なのか…？
そんな疑問が脳裏を過ぎる。
しかし、そんな私を現実に引き戻したのはサイレントの通信報告だった。
『フォックス２！』
完璧なタイミングだった。
どれだけの腕を持っていようとこれを避けることは現行の戦闘機では不可能。
そう思えるほどに完璧な射撃タイミングだった。
しかし、直ぐに私は考えを改めることになる。

速度１０００程でこちらに接近していたボギーは急激に加速し、上昇。
自身を撃ち抜かんと背後から迫るサイレントのミサイルを引き離した。
そう、サイレントのミサイルを純粋な速度で引き離したのだ。
『何だあの加速は⁉人間の耐えられる速度じゃないぞ⁉』
チューナーの悲鳴のような声が機内に響く。
直後、ボギーがこちらに向け翼を動かしながら突撃してきた。
『ナイーブ！何とか逃げろ！』
「クソっ！」
ボギーを振り切らんと操縦桿を傾け、スロットルを全力で押し込む。
最大加速。
地球の重力がわたしの体を貫く。
しかし、かまわない。
真っ当な動きではこの化け物から逃れることはできない。
しかし、ボギーは私の必死の抵抗を嘲笑うようにピッタリと背後に張り付いた。
ロックオンアラートが鳴り響く。
「クソ、クソクソクソッ！」
死んでたまるか、と言う思いを振り払うようにアフターバーナーを点火して加速しつつ操縦桿を激しく動かす。
しかし、必死の抵抗も虚しくボギーを振り払うことはできない。
しかし、ここであることに気づく。
ミサイルを撃ってこない。
ボギーは私の背後に張り付いたままロックオンをするのみで、なぜかミサイルを撃っては来なかった。
「こいつ、遊んでいるのか⁉」
私が死の恐怖を超えるほどの怒りを感じたその時、私とボギーの間を通るようにミサイルが発射された。
撃ったのはサイレント。

また助けられてしまったようだ。
『ナイーブ、下がって』
サイレントは一気に機体を加速させ、ボギーに接近する。
『フォックス2』
サイレントがミサイルを撃つとボギーは急激に速度を落とし、腹を空に見せるように反転。機首にサイレントが撃ったミサイルを捉えると、サイレントに少し遅れてミサイルを撃った。
直後、サイレントの撃ったミサイルとボギーの撃ったミサイルが衝突。
大きな爆発を起こした。
『あいつ、ミサイルをミサイルで迎撃したのか!?』
ノイズの茫然とした声がコックピットに響く。
あまりに非現実的な光景に、私は茫然とすることしかできなかった。
サイレントとボギーはその後睨み合いを続けるが、直ぐにボギーが反転し、先ほど見せた急激な加速で雲を切り裂きながら蒼穹の彼方へ消えていった。
「アレは一体何だったんだ…」
私の口がそんな言葉が漏れる。
『分からない。分からないが、今はまずこの戦場を生き残ったことを喜ぼう。よくやったな、お前たち』
私の言葉に応えるように無線から響いたコンダクターの言葉が響いた。